



不思議な堰^{せき}

以前にも書きましたが、筆者は大阪府箕面市に住んでいます。近所に箕面川が流れ、5月には蛍を楽しむことも可能。僅かですが、自然の残る住宅地です。下水道が普及して、清流を取り戻しつつあります。住民の有志が「川を美しくする会」を作り、月1回のゴミ拾い活動を続けています。護岸こそコンクリートで固められていますが、水の流れや野鳥の水浴びなどを楽しむことが可能になっています。



中嶋哲夫の「人事も歩けば」



ところが、1カ所だけ、美しくならない場所があります。堰です。川の2/3ほどをせき止め、今井水路という用水に水を導く構築物？です。といっても、川を遮って土嚢を積み、杭を打っただけ。そこに、流木やゴミが引っかかるわけです。そのゴミだけは、「美しくする会」の人たちも手をつけません。数人の男性が、年に1度は堰の手入れをされますが、大水のたび流木は溜まります。そこにゴミが引っかかります。

堰のゴミだけが残されるのが不思議なので、昔からの村の長老に聞いてみました。「あの堰は消防団で管理されてるの？」「いや～あの堰はこの村とは無関係なんだ。池田市の村の堰。誰がやってるのかも知らないけど、昔からこちらの村は手を出さないことになってる」とのこと。つまり、水路を利用する下流の農家が堰を構築し、維持しているの



▲箕面川の堰

です。堰の大きさや形は、長年の交渉で決められ、簡単には変えることができない。堰の大きさや形が、水の分配率を決めるから、安易な手出しがしにくい、ということのようです。

念のため、池田市の防災計画を調べてみました。今井水路の管理主体は「4カ村水利組合」となっています。組合は、2カ所の樋門を管理し、分岐した水路に水を分かち合います。1つの水路の水を4カ村が共同で利用していたわけです。水路は鎌倉時代に作られていますから、800年近い共同利用の歴史です。

水路脇を歩いてみました。住宅の間を縫って水路は続きます。水田は見つかりません。農業用水としては「賞味期限」を終えたと思います。にもかかわらず、灌漑用水の制度を維持しているのは不思議に思えます。しかし、用水路の維持を断念すると、農業を再開できなくなります。水路を維持すれば、農業を再開できる可能性が維持できます。可能性を残すためにインフラを維持する。無駄なようですが社会の厚みにつながると思います。

(MBO実践支援センター代表)